



HIGASHIKAWA HOKKAIDO JAPAN  
— THE TOWN OF PHOTOGRAPHY —

# 2017年 第33回写真の町東川賞

受賞者発表  
受賞式及びフォトフェスタ案内

北海道 上川郡 東川町

## 第33回 写真の町東川賞受賞作家

<海外作家賞> 対象国：ポーランド

**アンナ・オルオーヴスカ氏** (Anna Orłowska)

受賞理由：「Case study: invisibility」(2012-14) ほか、一連の作品に対して

<国内作家賞>

**本橋 成一氏** (もとはし せいいち)

受賞理由：写真展「在り処」(IZU PHOTO MUSEUM、2016年) 及び一連の作家活動に対して

<新人作家賞>

**野村 佐紀子氏** (のむら さきこ)

受賞理由：写真集「もうひとつの黒闇 Another Black Darkness」(Akio Nagasawa Publishing、2016年) 及び一連の作家活動に対して

<特別作家賞>

**岡田 敦氏** (おかだ あつし)

受賞理由：シリーズ「ユルリ島の野生馬」及び写真集「1999」(ナガトモ、2015年) に対して

<飛弾野数右衛門賞>

**小関 与四郎氏** (こせき よしろう)

受賞理由：写真集「九十九里浜」(春風社、2004年) ほか、郷土・千葉に根差した社会事象、風物を長年にわたり撮影し続けてきた活動に対して

### 第33回 写真の町東川賞審査会委員 (敬称略/五十音順)

浅葉 克己	(あさば かつみ)	アートディレクター
上野 修	(うえの おさむ)	写真評論家
北野 謙	(きたの けん)	写真家
楠本 亜紀	(くすもと あき)	写真評論家、キュレーター
中村 征夫	(なかむら いくお)	写真家
丹羽 晴美	(にわ はるみ)	学芸員、写真論
平野啓一郎	(ひらの けいいちろう)	作家
光田 由里	(みつだ ゆり)	美術評論家

## 第33回 写真の町東川賞審査講評

第33回写真の町東川賞審査会は、2017年2月21日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞48人、新人作家賞62人、特別作家賞22人、飛弾野数右衛門賞26人、海外作家賞21人。より多くの方々からノミネートしていただこうと、推薦者リストの拡充をすすめており、一昨年計106人、昨年計161人、今年計179人と増加している。8人全員の審査委員が、例年どおり、午前中に集合、写真集やポートフォリオなど、膨大な作品をじっくりと閲覧し、午後から審査に入った。

国内作家賞は、本橋成一氏に決定した。初期の未発表作「雄冬」「与論」から、代表作「炭鉱〈ヤマ〉」「上野駅」「屠場〈とば〉」「藝能東西」「サーカス」「チェルノブイリ」、最新作の「アラヤシキ」までの、9シリーズを編んだ『在り処』をはじめ、『築地魚河岸ひとの町』『上野駅の幕間 そして、青函連絡船』といった作品が浮かび上がらせる市井の人々の姿は、本橋氏の一貫した丹念な仕事を物語るものでもある。時を経てますます意義深いものとなるモノクロームの表現は、「写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品」という賞の規定にも、じつにふさわしい。

新人作家賞は、石川竜一、片山真理、菊池智子、野村佐紀子、林典子、吉野英理香の各氏が最終段階まで残り、野村佐紀子氏に決定した。先行する『黒闇』シリーズ等のイメージを用いて、はじめてソラリゼーションで制作した『もうひとつの黒闇』は、写真集では黒い紙に黒のインクで印刷という試みがなされている。独自の身体表現と繊細なまなざしが注目されてきた野村氏は、国内作家賞の候補にあがっていたが、こうした実験性に満ちた、刺激的な試みは、新人作家賞がより適しているのではないかという判断から、今回の決定となった。

特別作家賞は、北海道稚内市生まれ、札幌市出身の岡田敦氏に決定した。学生時代に、故郷の札幌近郊で撮影した友人や馬、風景などの被写体を、最新のデジタル技術と現在の感性で写真集にまとめた『1999』。2011年から撮影を続けている、根室の無人島であるユルリ島の風景や野生化した馬たちを追ったシリーズ「ユルリ島の野生馬」。記録性を越えた視点から照らし出された生命の在りようは、他のシリーズにも共通するものであり、出身地北海道での作品は、岡田氏の作品世界をいっそう豊かなものになっている。

「長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者」を対象とする飛弾野数右衛門賞は、小関与四郎氏に決定した。千葉県の新栄村（現・匝瑳市）に生まれ、自転車店に6年間年季奉公の後、1967年に写真店を開き、経営をしながら写真を撮り続けてきた小関氏は、砂浜が延々と続く遠浅の海での、オッペシと呼ばれる漁婦、フナガタと呼ばれる漁夫の過酷な労働をとらえた『九十九里浜』、『成田国際空港』、『国鉄・蒸気機関区の記録』、『クジラ解体』など、そこに暮らす写真

家でなければ撮れない光景を、ドキュメントし続けている。

海外作家賞は、対象国のポーランドから、アンナ・オルオーヴスカ氏が選ばれた。政治的な大きな変動を経験し、映像表現の伝統に育まれたポーランドの作品は、とても多様な厚みと広がりがあり、楠本亜紀審査委員の調査に基づいた説明も踏まえたうえで、審査に移った。オルオーヴスカ氏は若手作家を代表するひとりで、見る者のイマジネーションを誘う作品は、国際的にも脚光を浴びている。最近では、見えないもののテーマをさらに展開し、写真の可視性を問いかける作品も制作している。

今回の審査では、満場一致や大きな票差で決定された賞はなく、円卓を囲み、投票を繰り返し、作品内容から、賞の性質まで、多角的な意見交換と議論を重ねながら、各賞が決定された。審査委員それぞれの意見の食い違いはあっても、議論を尽くして決定していくのが、東川賞審査会の伝統的なスタイルだが、審査委員の3人が昨年度で退任、新たに3人が就任した今年度も、このスタイルは引き継がれている。そして審査会は、「写真文化首都」にふさわしい、素晴らしい作家たちを選出できたと自負している。

このような、変化しつつ伝統を継承していく在りようは、まさに東川町の特徴でもあるように思われる。東川賞もまた、1985年の「写真の町宣言」から30余年、一步一步積み重ねた町の人たちの努力と、そうした趣旨に共感した世界中の多くの人たちの共感の上に成り立っていることを実感する。「おいしい水」「うまい空気」「豊かな大地」という素晴らしい環境を誇りにする東川町は、「この小さな町で世界中の写真に出逢えるように、この小さな町で世界中の人々と触れ合えるように、この小さな町で世界中の笑顔が溢れるように」というビジョンを現実化する魅力に満ちている。受賞した素晴らしい作家たちを加え、東川町の人々と共に、また新たな一步を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査会委員 **上野 修**



Photo by Mikołaj Syguda

第33回写真の町東川賞 <海外作家賞>

## アンナ・オルオーヴスカ (Anna Orłowska)

ポーランド・ワルシャワ在住

1986年ポーランド南西部のオポーレ生まれ。2011年、ウッチ映画大学の写真学部修了。2013年、チェコのクリエイティブ・フォトグラフィ・インスティテュートを卒業。2010年、スイス、ローザンヌのエリゼ写真美術館で開催され世界各地を巡回した、30か国から80人の気鋭の若手写真家を選んだ「ReGeneration2: Tomorrow's Photographers Today」展の出品作家に選ばれる。2013年、フランスのイエール国際モード&写真フェスティバルのフォト・グローバル賞を受賞、ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアルアーツでの1年間のレジデンス権を与えられる。

ウッチ映画大学の修了制作「Leakage」(2011)は、木に横たえられた赤ちゃんや、ゾンビのような人物が混じる集合写真など、静謐でどこかシュルレアリスティックなイメージからなる。2015年にアルル写真フェスティバルで展示されるなど注目を浴びている。「Case study: invisibility」(2012-14)は、映画「透明人間」のスタイルや、町はずれに隔離された精神病者の施設、ピンクのユニコーンなど、「見えないもの」を巡る様々なケーススタディ。近作のシリーズ「Effortless exercise」(2016-)では、パラフィン写真を写真の表面に塗り、温度の変化によって下の画像が見えてくる作品なども制作している。

日常における「見えないもの」をテーマに、隠れた意味や、無意識、怖れ、ファンタジーなどを、現実とイリュージョンの境目のなかに探っている。

### <作家の言葉>

海外作家賞をいただき、大変うれしく思います。多くの偉大な受賞作家の方々の中に、私の名前を見ることは名誉なことです。言葉にするのはあまり得意ではないので、この素晴らしい贈り物を下さった東川町と審査会の方々に、「THANK YOU」とだけ言わせてください。

私は広く知られず、往々にして隠れて難解なことを理解するには、アートこそが世界を再考し、再解釈する手段になると考えます。それは即ち、会話の主流から抜け落ちたディテールや小さなストーリーのなかで、意味があると感じるものに焦点を当てることです。写真は、物事をシンプルに描写し、かつそれを複雑な疑問符に変える素晴らしい機会をくれます。私が芸術的視点を手にするに至ったこの媒体は、現代社会に強く影響を与え、形作ります。私たちがすでにイメージに盲目になっているとしても。

アンナ・オルオーヴスカ



The group portrait, 2011 from the series "Leakage"



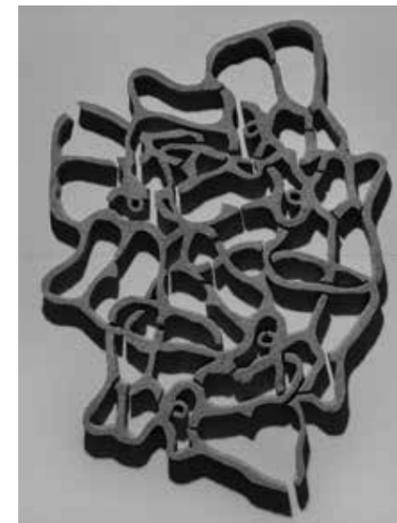
Discarded sculptures (dark pink), 2016



The hole, 2012 from the series "Case study: invisibility"



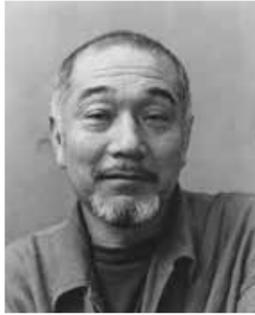
Model of the castle, 2014 from the series "Case study: invisibility"



Hedge Maze (Winckler's garden), 2016



Erotyk 2.3, 2016



第33回写真の町東川賞 <国内作家賞>

## 本橋 成一 (もとはし せいいち)

東京都在住

1940年東京都東中野生まれ。63年自由学園最高学部卒業。65年東京総合写真専門学校卒業。東京総合写真専門学校の卒業制作として撮影をはじめ、その後数年にわたり九州や北海道の採炭地に通い炭鉱住宅の日々を撮影した「炭鉱〈ヤマ〉」で、1968年に第5回太陽賞を受賞。チンドン屋、寄席芸人、大衆演劇など、失われつつある大衆文化・芸能を記録した「藝能東西」(1972年-)、東京と東北を結ぶ玄関口として、様々な人が行き交ったターミナル駅としての最後の風景を撮影した「上野駅」(1980年-)、大阪・松原市の新旧屠畜場で働く人々を記録した「屠場〈とば〉」(1986年-)など、市井の人々のたくましく豊かな生き様をとらえてきた。1991年からはチェルノブイリ原子力発電所の被災地ベラルーシを何度も訪れ、汚染地域で暮らす村民を記録した「無限抱擁」(1995年)で日本写真協会賞年度賞、写真の会賞を受賞。98年「ナージャの村」で第17回土門拳賞受賞。同地で映画「ナージャの村」(1997)「アレクセイと泉」(2002)を完成させた。2015年には長野県小谷村の集落で、多様な背景を抱えた人たちが農業を中心とした共同生活を送る「真木共働学舎」を舞台にしたドキュメンタリー映画「アラヤシキの住人たち」を公開。

主な個展に「ナジェージダ―希望」(東京都写真美術館、2002年)、「在り処」(IZU PHOTO MUSEUM、2016年)など多数開催している。

### <作家の言葉>

1960年代から始めた写真や映像との付き合いも50年以上になり、失われた場所や風景も多くなりました。時代とともに、人びとの営みも変化していますが、ぼくが撮ってきたものはみな奥底でつながっているようでした。人や生きものの豊かな生、それを育む場所。ぼくはそれを「在り処」と呼びました。

IZU PHOTO MUSEUMでの展覧会「在り処」は、森陽子学芸員とともにぼくのこれまでの写真作品を改めて見つめ直す契機になりました。その結果、ひとつひとつぼくのこれまでの歩みを積み重ねた集大成とも言える展示となりました。ですから、この展覧会が評価され、今回の賞をいただけたことはぼくにとって特別な意味をもつ、とても大きな贈り物なのです。審査員のみなさま、スタッフのみなさま、ありがとうございました。これからも、ぼくの「在り処」を探して歩いていきたいと思っています。

本橋成一



炭鉱〈ヤマ〉／鞍手、福岡 1965年  
The Coal Mine, Kurate, Fukuoka, 1965



サーカス／関根サーカス 沼津、静岡 1976年  
Sekine Circus, Numazu, Shizuoka, 1976



上野駅／上野駅、東京 1981年  
Ueno Station, Tokyo, 1981



屠場〈とば〉／松原、大阪 1986年  
Slaughterhouse, Matsubara, Osaka, 1986



チェルノブイリ／ドゥヂチ村、ベラルーシ共和国  
Chernobyl, Dudichi Village, Belarus, 1996



アラヤシキ／小谷村、北安曇郡、長野 2013年  
Arayashiki, Otari, Nagano, 2013



第33回写真の町東川賞 <新人作家賞>

## 野村 佐紀子 (のむら さきこ)

東京都在住

1967年山口県下関市生まれ。1990年九州産業大学芸術学部写真学科卒業、翌年より荒木経惟に師事。1993年初の個展「針のない時計」(egg gallery)を開催以降、東京を中心にヨーロッパ、アジアでも精力的に個展・グループ展を行っている。

初の写真集『裸ノ時間』(平凡社、1997年)は、ベッドに横たわる裸体の男性を中心としたモノクロームの写真で、暗闇に差し込む淡い光のなか、濃密な時間と空間がとらえられている。初のカラーフィルムを使用した『夜間飛行』(リトルモア、2008年)は超小型カメラで7年にわたり撮影されたもの。これまで作品集としてまとめられることのなかった夜の風景写真を中心に、裸体の男性が湿り気のある空間で密やかに写されている。2013年、『NUDE / A ROOM / FLOWERS』(マッチアンドカンパニー、2012年)でさがみはら写真新人奨励賞受賞。長年モデルを務めた友人の遺影に始まり、ヌード、ポートレート、風景、子ども、花など、20年以上に及ぶ作品から選ばれた、様々なモチーフの写真で織りなされた写真集は、親密で静謐な世界にひそむ生と死の予感に満ちている。

2016年には6名の男性モデルと濃密な3日間を過ごすなかで生まれた写真展「雁」(BA-TSU ART GALLERY)を開催。同年に刊行された写真集『もうひとつの黒闇 Another Black Darkness』(Akio Nagasawa Publishing、2016年)は、先行する『黒闇 Black Darkness』(2008年)等のイメージをソラリゼーションによって制作した実験的なシリーズ。闇のなかから浮かび上がる裸体や外界の風景のなかに、普段は閉ざされた奥深い感情や揺らぎをとらえる作品の発表をつづけている。

### <作家の言葉>

このたびは思いがけず新人賞をいただくことになり、心からうれしく思っております。

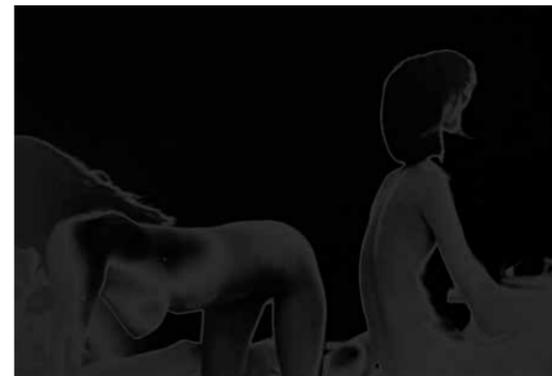
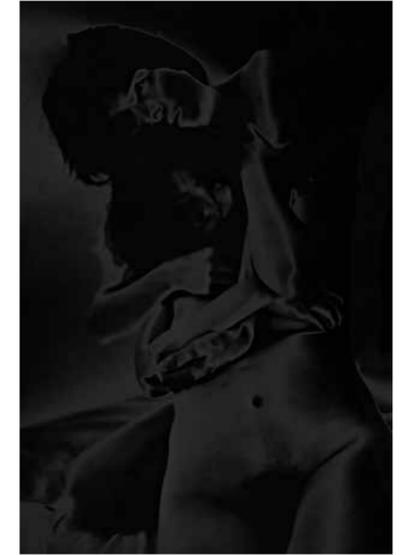
目の前におきている少しのゆらぎを見逃さないように撮影してきました。

振り返ると長い時間の写真の中には愛がつまっていました

いつも大切なことを教えてくれる写真に感謝しています。

モデルになってくれた皆様、展覧会や写真集に関わり支えてくださる皆様に深く感謝致します。

野村佐紀子



「もうひとつの黒闇」シリーズより  
From the series "Another Black Darkness"



「黒闇」シリーズより  
From the series "Black Darkness"



第33回写真の町東川賞 <特別作家賞>

## 岡田 敦 (おかだ あつし)

東京都在住

1979年北海道稚内市生まれ、札幌市出身。2003年大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業、2008年東京工芸大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了。

2003年、「生きること」に焦点をあてた写真集『Platibe』、『Cord』（窓社、2003年）を刊行。2007年、自分の存在を確かめようとする日本全国の若者約50人を撮影した『I am』（赤々舎、2007年）で第33回木村伊兵衛写真賞を受賞。世界に潜む崇高な美しさを写真にとらえようとした『ataraxia』（青幻舎、2010年）、『世界』（赤々舎、2012年）、命の誕生の時間を赤裸々に撮りおさめた『MOTHER』（柏艚舎、2014年）など、精力的に作品を発表している。

『1999』（ナガトモ、2015年）は、写真学生だった1999年に原風景ともいえる故郷の北海道で撮影した写真をもとに、現在の感性と最新のデジタル技術を融合させて作った写真集。2011年からは、北海道根室市からの委託により、根室半島沖に浮かぶユルリ島（無人島）に生息する野生馬の撮影を続けている。かつて「馬の楽園」といわれたユルリ島には、1950年頃に昆布漁の労力として馬が持ち込まれた。1971年に最後の漁師が島を去り、無人島となったいまでもその子孫が生きている。現在では数頭を数えるのみとなった消えゆく運命の馬たちを、北海道の大切な文化や歴史の証として記録に残す試みを続けている。2014年北海道文化奨励賞受賞。

### <作家の言葉>

北海道根室半島沖にあるユルリ島の撮影を2011年から続けてきた。島にはかつて昆布漁の労力として持ち込まれた馬の子孫が、無人島となったいまでも生きている。多い時には約30頭の馬が生息し、給餌を受けず、交配や出産は自然にまかされてきた。しかし2006年、間引きをしていた漁師たちの高齢化もあり、牡馬が島から引き上げられた。島には14頭の牝馬だけが残し、馬はやがて消えゆく運命となった。2011年に12頭いた馬は、2017年3月には4頭にまで減った。根室半島沖に浮かぶ小さな楽園で生きる馬の姿を見ながら、わたしは北海道の歴史と文化、生命の在りようを考えてきた。

島は北海道の天然記念物や国の鳥獣保護区に指定されているため、人の立入りが禁止されている。一人では辿り着くことのできなかつた島。わたしの活動を支援してくださった根室市、根室市教育委員会、落石漁業協同組合をはじめ、根室の多くの方のご理解とご協力に感謝申し上げます。そして、たくさんの美しい光景を見せてくれたユルリ島と、そこで生きてきた馬たちに、この賞を捧げたい。

岡田 敦



「ユルリ島の野生馬」シリーズより (2011年-)  
From the series "Horses on Yururi Island" (2011-)



「1999」シリーズより  
From the series "1999"



第33回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

## 小関 与四郎 (こせき よしろう)

千葉県 旭市在住

1935年千葉県匝瑳郡栄村（現・匝瑳市）生まれ。新制中学を卒業後、自転車店に年季奉公しながら、写真を独学で始める。カメラ雑誌の写真コンテストに応募し、入賞を重ねる。1962年、『カメラ毎日』に漁婦を写した「暖をとるオッペシ」を発表、同年間賞受賞。1967年に千葉県横芝町で写真店を開き、経営をしながら写真を撮り続ける。

1973年、長大な遠浅の海が続く漁港のない九十九里浜で、船の揚げ降ろしや魚の荷揚げの手助けをする「オッペシ」と呼ばれる漁婦や、「フナガタ」と呼ばれる船に乗る漁夫の、海と共にたくましく生きる姿を歳月をかけて撮影した写真集『九十九里浜』（木耳社、1972年）で日本写真協会新人賞受賞。主な写真集に、開港までの反対闘争も含めた成田空港を写した写真集『成田国際空港』（木耳社、1982年）、失われゆく九十九里浜の自然、海の生活を写真と文で活写した『九十九里有情』（東京新聞出版局、1993年）、昭和40年代前半に千葉県の国鉄・佐倉機関区で撮影された、今はなき蒸気機関車の整備にあたる機関士たちを追った写真集『国鉄・蒸気機関区の記録』（アーカイブス出版編集部、2007年）、千葉・和歌山・宮城などで撮影し、岐路にたつ日本の捕鯨文化を見つめる『クジラ解体』（春風社、2011年）、新たに撮影した写真も含め再編した『九十九里浜』（春風社、2004年）など。

現在に至るまで、生まれ育った郷土と、そこで働き暮らす人々を撮り続け、貴重なドキュメントになるとともに、現代の社会、文化を問いかける作品にもなっている。

### <作家の言葉>

今回の授賞は、私にとってはあまりにも易々としたもので、どうしても眉唾もの様で信じる事が出来なかった。然し何年前に、審査員のお一人と横芝のスタジオでお会いしたこともある…とも…一向に記憶には残って居ない。

私の信念は一期一会で対象に向かい、二度と出会う事のないという思いで撮る。それが時を過ぎると大きな記録となる。不器用な田舎写真屋…ふり返ってみると、賞というものは縁がなかった。九十九里浜の生活風土を撮っていると、「オッペシ（浜女）の小関」と呼ばれ、十指に余る一流作家などがいろいろとアドバイスをしてくれ、JPSの会長であった渡辺義雄さんや三木淳さんに入会を頼むと、君はもう自分の立派な名前があるのではないかと相手にされなかった。今は協会から逆指名を受け、記念バッジなどいただき、81歳の老人写真屋はいろいろな難病と闘いながら今一枚でも多くと、保存につとめている日々なのです。ありがとうございました。

（注）ベレー帽のバッジが私の作品です。

小関与四郎



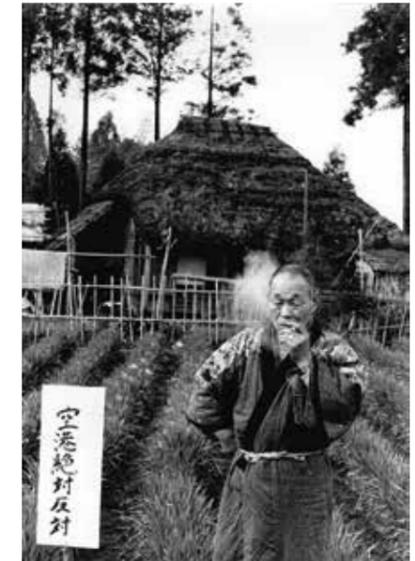
背中一面に竜の彫り物をした迫力あるフナガタ  
『九十九里浜』より  
1963年頃



堀川浜（野栄町）暖をとるオッペシたち  
『九十九里浜』より  
1963年頃



栢田浜（野栄町）浜昼顔の群生  
『九十九里浜』より  
1980年頃



富里村  
『成田国際空港』より  
1960年頃



『国鉄蒸気機関区の記録』より  
1960年代後半



和田浦港とツチクジラ  
『クジラ解体』より  
2010年頃

## 第33回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2017～

### <受賞作家作品展>

会期：7月29日（土）～8月30日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：30（7月29日は15：00～21：00、8月30日は15：00まで）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（7月29日、30日は無料開放）

海外作家賞……………アンナ・オルオーヴスカ

国内作家賞……………本橋成一

新人作家賞……………野村佐紀子

特別作家賞……………岡田 敦

飛弾野数右衛門賞……小関与四郎

### ●7月29日（土）

14：00～14：30 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション（受賞を祝う集い）

### ●7月30日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査委員、ゲスト

## ■■■■ 写真の町とは ■■■■

1984年、東川町に開墾の跡がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、このまだ若い町よりも、わずか半世紀ほどはやく生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出合いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出合いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル（愛称：東川町フォトフェスタ）」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる写真選手権大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

そして2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適度な町づくりを目指し「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心地として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を果たしていきます。

## ■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

### ●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

### ●賞

写真の町東川賞＜海外作家賞＞	1名	賞金100万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞	1名	賞金100万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞	1名	賞金50万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞	1名	賞金50万円
写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞	1名	賞金50万円

### ●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

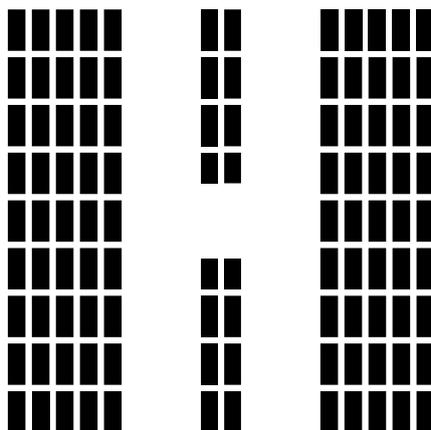
### ●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作品を、東川町長が委嘱した委員で構成する〔写真の町東川賞審査会〕において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念シンポジウム等を開催します。

### ●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、〔写真の町・東川町文化ギャラリー〕に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。



〈お問い合わせ先〉

**東川町写真の町実行委員会**

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー  
東川町 写真の町課 (担当: 矢ノ目・下込・吉里)

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

E-mail: [photo@town.higashikawa.lg.jp](mailto:photo@town.higashikawa.lg.jp)

<http://www.photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家展出品作に限りません。